



# 人情ライブ! 文楽、親子共演。

上益城郡清和村  
佐藤 キミさん(78才)  
文夫さん(63才)  
利和さん(35才)



ベンベン、胸の奥にしみ入るような太棒の三昧の音。その哀切な撥音を合図に、ぐいぐいと見る者を引き込む不思議な世界。文楽は、浄瑠璃と三味線と人形が織りなす日本独特の人形芝居。私たちの中に、脈々と流れる日本のこころを伝える伝統芸能だ。

その文楽を、表看板に掲げる上益城郡清和村。その名のとおり澄んだ空気と、美しい緑に包まれた隠やかな山村だ。

この村に文楽が伝わったのは、今から百数十年前、嘉永年間のこと。それから、農業のかたわら、余技として村民の間で親しまれ、一時衰退の時期もあったが、再び村人の手で復興された。

この清和の文楽に、昭和の初めから一家をあげて取り組んでいる人たちがいる。現在十七名の文楽保存会のメンバー、佐藤さん親子だ。

もともとは、三年前に亡くなられたキミさんのご主人兼久さんが、この清和文楽復興のリーダーで、義太夫さんのお世話からすべてをいただいたという程、熱心な方だった。そのご主人の影響で、というキミさん。そして、幼い頃からそんな環境で育った文夫さんも、自然に人形を持つようになった。文楽人形は、三人で一体を動かす。兼久さんがお元氣な頃には、親子三人でひとつの人形を動かしていたこともある。

文楽の魅力のひとつは、庶民のこころをとらえる浄瑠璃のおもしろさ。



物語のうち、佐藤さん親子の十八番は「絵本太功記」。本能寺事件の後、光秀の母が、息子を悟すくだりがもつとも好きだというキミさん。一方、やり始めたら、もうすっかり光秀になりきってしまうという文夫さん。名実共に親子共演。お二人とも「テレビやどこかのお芝居で太閤記をやっていると聞けば、やっぱり見たいと思いますね」と声をそろえる熱心さだ。

そして、これから文楽を始め、利和さん。この村では、ちやうどこの道にはいる適齢期。同じ世代の人たちと、これから、清和文楽を盛りたてていこうと張り切っている。



勸善懲惡や、忠考、義理、人情などを描いた物語には、今の時代にも通じる人間の情感がある。文夫さんが、一番文楽にひかれるのも、この点だという。

そして、もうひとつの魅力は、いきいきと、感情を帯びた人形の動き。限られた表情しか持たないはずの人形が、時には生味の人間以上のリアリティで迫ってくる。手や足、そして、特にそれらをリードする頭。それぞれの部分を持つ者が、「いかに物語の中味を分かっているか」が、そのまま人形の動きとなつて出てしまう。「男より女の人形の方が難しい」というキミさん。やはり、女心の機微が分かれば分かる程、その表現も難しくなってくるのかも知れない。

現在、清和でやっている七つの

日本人の豊かな情感とともに、いつまでも、この静かな山里に、生きつづけてほしいと思う。

時代の流れとともに、手から手へと代々受け継がれていく人形たち。命を吹き込



利和さん

キミさん